



TITLE:

オルバースの跡を尋ねて

AUTHOR(S):

山本

CITATION:

山本. オルバースの跡を尋ねて. 天界 1938, 19(212): 105-109

ISSUE DATE:

1938-11-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167751>

RIGHT:

オルバースの跡を尋ねて

山 本 生

こんど、私が歐洲旅行の途上に於いて、わざ／＼ドイツのブレーメン市に立ち寄つたのは、百餘年前の偉大なる天文家オルバースの跡を偲ぶためでした。尤も、私はブレーメンへは之れが二度目でありまして、始めての折といふのは一九二四年の末に、やはり此のオルバースの跡を尋ねたのですが、當時は非常な寒さで、記念碑など深く掩ふたまでであり、殆んど目的を達しませんでした。それで、今年の旅行中に同じブレーメンへ再遊を試みた次第でした。

第十八世紀の末から第十九世紀の初め頃、新興のドイツ國には優れたアマチュア天文家が澤山現はれましたが、中にも、最も偉大な傑物はオルバースでした。彼は一七五八年にブレーメン郊外のアーベルゲン村に一牧師の子として生れ、ゲチンゲン大學に於いて醫學を修學中、ふとケストナー教授の數學の講義

を聴いたことから天文學に興味を覚え、間もなく『彗星軌道の最も簡單明快な計算法』といふ論文を書きましたのを、當時ゴータ市に天文臺を経営してゐたツアハ男爵が見て大に賞讃し、自ら出資して、一七九七年に出版しました。此の論文の中にオルバー스는八十七個の彗星軌道表を掲げましたが、後年（一八四七年）之れはエンケに依つて百七十八個に増加され、更に一八六四年にガレ之れを二百四十二個の軌道表に増しました。彗星目錄は更に一八九四年のガレの増補出版したものに四百十一個の彗星表となり、更に最近に之れは山本進氏の六百四十七個の彗星表となつて擴張されました。

オルバー스의彗星研究は堂に入つたもので、其の熱心は多くの後輩を刺激しました。自身も亦新彗星の搜索に努力して、遂に其の一涯中に六つの新彗星を発見しました。うち一つ（一八一五年発見のもの）は週期七十二年の海王星族彗星として、一八八七年にも再歸し、「オルバーズ彗星」として、永久に其の名を學界に留めて居ります。

太陽系の構造上から見て、火星の軌道と木星の軌道との間隔が餘りに廣いで、此の空間に必ず未知の遊星が在る筈だと考へ、同志を語らつて「リリエンタル組」を組織し、此の未知星の組織的な搜索をやつた主唱者はオルバースでした。リリエンタルとは、當時、ドイツのアマチュア天文界の大先輩シェーターが經營してゐた天文臺の所在地で、之れはブレーメンの東北約十軒ほどの寒村ですが、此所で發起人會が開かれたのです。果して未知星は組の中の一入ビヤジによつて發見されましたが、不幸にして其れが間もなく行方不明になつたのを、オルバースが苦心の末一八〇二年の初日に首尾よく再發見し、更に同じ年の三月二十八日にはオルバースが未知星第二號「バラス」を發見し、其の後、一八〇七年には又々オルバースが未知星第四號「エスタ」を發見しました。

此等の「未知星」は今一般に「小遊星」と呼ばれて居ます。初め、只一つかと思はれてゐた「未知星」が四つにもなり、更に其の後ぞくぞく増して、今は

二千個にも近くなつてゐるのも驚異でありますが、オルバースは百年も以前に既に此等の小遊星の成因が、一大遊星の崩壊によるものだらうとの説を發表して専門學者をアツと言はせたことがあります。

オルバースは一七八一年にブレーメン市に住居を構へ、二十三歳の身を以つて、醫術を開業しました。しかし、晝間は業務にいそしんでゐても、夜になると、毎夜々々、望遠鏡によつて、天體の觀測をするといふ、風變りな醫師でした。當時、フランスには大革命が起り、其餘波を受けて、歐洲全體には不安と動搖とがみなぎつてゐましたが、オルバースは此うした世の中に於いて、社會のためにも力強く働きかけ、ナポレオン戦争の跡仕末をつけるために、ロマや、パリへ、ブレーメン市の代表者として出張したこともありました。しかしながら、一面に於いて、星に對する愛と執着とは、老年に至るまで衰へず、殊に「アマチュア」の立ち場から、研究を樂しみ、獨創と自由を享樂しつゝ、一方に於いて國外國內の天文界に於ける多くの碩學を友とし、又、若年氣鋭の新

進學者を指導訓育したことも、夥しくありました。オルバースが親切に世話した若い天文家の中で、後年、大學者となつた隨一はかのベセルでした。ベセルは球面天文學を大成した人で、ドイツの學界に於ける第一人者であります。若い頃は、ハーデングと共に、リリエントール村のシレーターの天文臺に助手をつとめ、同時に、オルバースの熱心な指導を受けたのでした。ガウスも亦オルバースに指導されたことが多いと言はれます。學の大局から見れば、オルバースが一介のアマチュアの身を以つて、よくベセルやガウスを教導した功績は或る意味に於て、寧ろ彗星や遊星の發見以上の價值があるとも言へます。

オルバースの偉大性を永久に記念するため、ブレーメン市にはオルバース街といふ通りがあり、又、一八五〇年には、市の東南に近く、美術館前の公園の中央にコンクリート作りの立派な記念像が建てられ、春から秋へかけ、始終美しい草花に飾られて居ます。(十三・十・廿五)